

発展的話題：微分方程式の幾何学的数値解法（構造保存数値解法）

物理の問題を、物理らしく解く数値解法。

≒ 方程式の根幹を成す幾何学的構造を離散化後も保存する数値解法。

大昔物理学者によって原型が考案された（1900年～1960年代頃）あとは数値解析学分野で発展したが（1980年代～2000年代）、最近では物理学分野にも新展開が還流し、物理学者によって再び使われるようになっていく（2010年代～）。

■ Symplectic 数値解法

Hamilton 系： $z = (\mathbf{q}, \mathbf{p})^\top$  ( $\mathbf{q}, \mathbf{p} \in \mathbb{R}^d$ )， $H(\mathbf{q}, \mathbf{p})$  を Hamiltonian として

$$\frac{d}{dt}z = J\nabla H(z), \quad \text{where } J = \begin{pmatrix} 0 & I \\ -I & 0 \end{pmatrix}.$$

Symplectic Euler 法：

$$\frac{\mathbf{p}^{(m+1)} - \mathbf{p}^{(m)}}{\Delta t} = -\frac{\partial H}{\partial \mathbf{q}}(\mathbf{q}^{(m)}, \mathbf{p}^{(m)}), \quad \frac{\mathbf{q}^{(m+1)} - \mathbf{q}^{(m)}}{\Delta t} = \frac{\partial H}{\partial \mathbf{p}}(\mathbf{q}^{(m+1)}, \mathbf{p}^{(m+1)}).$$

Hamiltonian が「separable」： $H(\mathbf{q}, \mathbf{p}) = T(\mathbf{p}) + V(\mathbf{q})$  のとき、これは陽解法。

Symplectic 解法は以下の特徴を持つ。

- (定義) 解法の定める離散写像が symplectic (正準変換)。
- 「影の Hamiltonian」： $\tilde{H} = H + \Delta t H_1 + \Delta t^2 H_2 + \dots$  が (形式的に) 存在し、その定める軌道の上に近似解が乗る。

■ 離散勾配法

離散勾配：滑らかな関数  $f: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$  に対して、 $\nabla_d: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}^d$  が「離散勾配」であるとは、すべての  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^d$  に対して、以下を満たす場合を言う。

- $\nabla_d f(\mathbf{x}, \mathbf{y}) \cdot (\mathbf{y} - \mathbf{x}) = f(\mathbf{y}) - f(\mathbf{x})$ ,
- $\nabla_d f(\mathbf{x}, \mathbf{x}) = \nabla f(\mathbf{x})$ 。

次の形の微分方程式を考える（「勾配流」と呼ぶ。特殊ケースとして Hamilton 系も含まれる）。

$$\frac{d}{dt}z = A\nabla H(z), \quad A: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}^d.$$

係数行列  $A$  が歪対称 ( $A^\top = -A$ ) のときこれは「保存系」： $(d/dt)H = 0$ ，半負定値のとき「散逸系」： $(d/dt)H \leq 0$ 。

次の算法：「離散勾配法 (スキーム)」は、この保存性・散逸性を離散系でも担保する。

$$\frac{z^{(m+1)} - z^{(m)}}{\Delta t} = A\nabla_d H(z^{(m+1)}, z^{(m)}).$$

このスキームは残念ながら常に陰的である。

離散勾配は一般に (ひとつの  $H$  に対して) 無数に存在する。簡単な場合は視察により因数分解するのがよい。より一般的な公式もいくつか知られている。

例：(Gonzalez (1996))

$$\nabla_d H(\mathbf{x}, \mathbf{y}) := \nabla f(z) + \frac{f(\mathbf{y}) - f(\mathbf{x}) - \nabla f(z) \cdot (\mathbf{y} - \mathbf{x})}{\|\mathbf{y} - \mathbf{x}\|^2} (\mathbf{y} - \mathbf{x}), \quad z := (\mathbf{x} + \mathbf{y})/2.$$

演習。余力があれば次の2点を示してみよ。(i) Gonzalez の離散勾配法が実際に離散勾配の定義を満たすこと、(ii) 上の離散勾配スキームが離散的な保存性・散逸性をもつこと。

[参考文献]

E. Hairer, C. Lubich, and G. Wanner, Geometric Numerical Integration, Springer, Heidelberg, 2006.

(※適切なリンクから行くと東大でダウンロード可能)

松尾宇泰, 宮武勇登, 微分方程式に対する構造保存数値解法, 日本応用数学会論文誌, **22** (2012), 213-251.

(※オープンアクセス)